



写真：電子制御工学科5年 野村明成「花火」

1. 図書館へ行こう（詫間キャンパス情報工学科 奥山真吾）
2. 入賞結果発表
3. 講評
4. 入賞作品紹介

高松	読書感想文	優秀賞	建設環境工学科	2年	岡田加奈子
		佳作		1年3組	上井 浩輔
	千頁読破記	佳作	制御情報工学科	3年	永谷 昌也
		佳作		1年1組	中井 都由
		佳作		1年2組	大西あかね
	夏休み体験文	優秀賞	制御情報工学科	3年	黒田 一弘
詫間	読書感想文	1位		1年7組	矢野友加里
		2位		1年5組	石本美奈子
		2位		1年5組	林 水輝
		2位	電子システム工学科	2年	河田 紗希
		3位		1年6組	間部 僚太
		3位		1年7組	海山 未史
5. 教員によるエッセイ
6. 教員・学生による推薦図書（22編）
7. 貸出ランキング（上半期）
8. 図書館からのお知らせ

図書館へ行こう

情報工学科
奥山 真吾



人生の師、という言葉がある。人は生きていけば必ず、おそらく何歳になっても悩む。たとえば「私は何のために生まれてきたのか」という答えの出ない問いに苦しむという体験には、年齢制限がないらしい。そのように、自ら作り出した時の狭間に落ちそうな時に、あの人ならばどう考えるだろう、という風に参考にする人がいるとすると、それが人生の師だと思う。悩みを打ち明けて相談できる人になって、なかなか出逢えるものではないし、私たちは随分幼い頃から、悩みというのは人に相談できなくて、自分の中で飼うことに慣れている。だから、「あなたはどうか考えますか？」と人生の師に問うとき、それは大概届かない声であり、問うのも私、答えるのも私、なのである。

だから、稀なことだと思うが、自分の親や、学校の教師の中に人生の師を見いだせる人はとても幸せだと思う。一方で、人生の師を全く持たないという人がいるなら、それは…このような言い方をして良いのかとてもためらうけれど、勇気を出して言うならば…とても不幸だと思う。

その様な人は、真に一人で悩むこととなり、悩みに押しつぶされてしまうのではないかと心配である。あるいは、全ての問題から目をそらし、賑やかなテレビ番組やゲームのような麻醉薬に人生を預けて生きていくのだろうが、この世に生を受けてそのように過ごすのは大変もったいないことだと思う。

人生の師に出逢うための一つの方法は、読書することだと思う。本を読むということは即ち考えるということである。私達が思い悩む時、考えはとりとめがなくなり、むしろただただ迷っている、という状態になることが多い。そうやってじゅくじゅく考えるのも、若い頃の経験としては大きな意味があるのだろうが、ものさしを当てるようにして、考える道筋を示してくれるのが本である。ある本が気に入れば、同じ著者の別の本も読みたくなる。そこで期待が裏切られなければ、その著者の本を全て読みたくなる。もう、その著者はあなたの人生の師である。

図書館では沢山の本があなたを待っている。この「図書館だより」にも学生・教員による推薦図書の記事があり、とても参考になる。さあ、今すぐ図書館へ行こう！

3月11日の大震災による津波で、多くの方が亡くなりました。また、今も福島で原発事故の収束のために闘っている人達があります。津波の被害に遭って家族も家も仕事も失った人達の中に、やむを得ず原発の過酷な環境で働いている人がいることを想像して、やるせない思いがつのります。生きることの意味について、こうして考えることができるという幸せな境遇について、深い慎みとともに感謝します。

夏休み読書感想文・千頁読破記・夏休み体験文 入賞結果発表

夏休みの読書感想文・千頁読破記・夏休み体験文の入賞者の表彰式を高松キャンパスでは11月2日(水)に、詫間キャンパスでは11月4日(金)に実施しました。



高松キャンパス表彰式



詫間キャンパス表彰式

〈高松キャンパス〉

読書感想文

優秀賞 建設環境工学科 2年 岡田加奈子
佳作 1年3組 上井 浩輔

千頁読破記

佳作 制御情報工学科 3年 永谷 昌也
佳作 1年1組 中井 都由
佳作 1年2組 大西あかね

夏休み体験文

優秀賞 制御情報工学科 3年 黒田 一弘
佳作 電気情報工学科 4年 松永 大

佳作 建設環境工学科 4年 松浦 元輝
佳作 建設環境工学科 2年 紙本四季子

〈詫間キャンパス〉

読書感想文

1位 1年7組 矢野友加里
2位 1年5組 石本美奈子
2位 1年5組 林 水輝
2位 電子システム工学科 2年 河田 紗希
3位 1年6組 間部 僚太
3位 1年7組 海山 未央

講評

高松キャンパス
一般教育科 長谷川 隆

高松キャンパスでは、国語科において、4年生以下を対象にした夏休み課題文を課しています。読書感想文、千頁読破記、夏休み体験文の中から各自が自由に1つを選んで提出するというものです。今回は、合計564編ありました。その中から、入賞してこの図書館だよりに掲載した作品に対し、寸評をします。

読書感想文優秀賞岡田さんの「学校という社会」は、赤川次郎の『校庭に、虹は落ちる』を読んだものです。中学3年のときに読んだものを再読し、別な印象を持ったそうです。それは登場人物が、きちんと『人』と感じられる感覚だったそうです。悪役がいい子になり、正義漢が浮気をする。2年間という時間が岡田さんを成長させ、人間を観る目を深めているところに魅力があります。

佳作の上井君『永遠の0』も再読だそうです。「特攻隊員として南西諸島沖に散っていった」宮部久蔵の物語です。「戦いの天才だが臆病者」で「誰よりも強く優しい」サムライ、口癖は「娘に会うまで死ねない」です。上井君は、教え子の代わりに死ぬという道を選んだ宮部の生き方に衝撃を受けています。私は、臆病者だからこそ教え子の代わりに死ぬという道を選んだのだと感じました。じっくり読んでみたくなる小説です。

千頁読破記は、字数を1000字以上にしています。400字詰原稿用紙3枚程度では正直物足りないものがありました。そのため、優秀賞に該当する作品はありません。佳作3編を選んでいきます。

永谷君の「ベストセラーの法則」は、山田悠介の小説を読んだ冷静な分析でした。山田悠介のバランス感覚の根底には、徹底的な現地調査や下準備があったと指摘しています。

1年生の中井さんも大西さんも、本を読むのが嫌いだ、がこの課題があるので読んでみようと思ったと書いています。その読破記には新鮮さがありました。生まれて初めて1000ページに挑戦したからでしょう。そして、中井さんはミステリーを、大西さんは「図書館戦争」シリーズを読みました。「初めて一冊読み終えたとき、ものすごい達成感に満ちていました。」と大西さんは書いています。しかし、その大西さんが調子に乗って他の本に挑戦すると三日坊主になってしまったそうです。「心の底から面白いと思える本しか最後まで読めない」ことを思い知らされたそうです。しかし、途中で投げだすとしても、

面白いと思える本に出会うためには、沢山の本を読まなければなりません。これからも、是非、チャレンジして行ってほしいと思います。

夏休み体験文には見るべきものがありました。黒田君は読書感想文を書くつもりで書き始めたのですが、内容は、本の感想文ではなく、「精読」と「読書」の関係でした。自分の体験を通して、物事を見る視点が変化していくところに斬新さがありました。

詫間キャンパス
一般教育科 富士原 伸弘

平成23年度の読書感想文コンクールは103編の応募を得た。その中から1位に矢野友加里「難病東大生」を読んだ、2位に石本美奈子「命の尊さ」・林水輝「マルカの長い旅」を読んで、河田紗希「親子間の愛情」、3位に間部僚太「表裏一体の謎」・海山未央「シャングリ・ラを読んで」が選ばれた。1位の「難病東大生」を読んだのは、難病を発症した東大生が絶望を乗り越え、前向きに生きていこうとする姿に対する筆者の感動が素直に表現された力作である。自分の感想を丁寧に表現しようとする気持ちが伝わってくる内容となっており、多くの審査員から好評を得た。2位の3編はいずれも自身の体験と重ね合わせながら感想を展開する良作であったが、1位に少し及ばなかった。3位の2編は異色作である。「表裏一体の謎」は古典的名作「ジキル博士とハイド氏」、「シャングリ・ラ」はSF「シャングリ・ラ」が題材となっている。両編とも作品に対する筆者の思いが強く伝わってくる感想文となっている。文章は荒削りで繊細さに欠けるが、迫力はある。今後こうした意欲的な感想文をどんどん応募してきて欲しい。

平成23年度は全体として「よくできた感想文」が多かった。感想文の書き方に慣れているのだろう。ただ、慣れていることが「良い感想文」に繋がるわけではない。どこかでみたような通り一遍の「よくできた感想文」では人を引きつけることは出来ない。形式的な表現から離れて、独自の表現を見つけてみて欲しい。また、残念ながら今回インターネットに出回る文章を改編して提出したものがあつた。電子情報系の高専生として絶対にやるべきではない行為である。このような悪質な行為を絶対にしてはいけない。肝に銘じておいて欲しい。次年度の読書感想文コンクールに期待したい。